

こに留意している。

①②は、まったくちがう文脈ながら、「普遍」概念とアジアの関係を考究した最新の研究成果で、いかに西洋中心の歴史観・世界観が世界におけるアジアの位置づけを左右してきたか、あらためて認識できる。

③④⑤は、各々の視角から、遊牧・農耕の南北交渉が東洋史のダイナミズムを形成した史実経過を描く古典というべき名著。

すなわち選んだ書籍は、いずれもアジアを基軸に世界史全体を対象とし、日本人の世界観・歴史観に関わるものである。さもなくば東洋史・アジア史を名乗る資格はない。「グローバル・ヒストリー」を標榜する時代なら、専門家も含めて、もう少し自覚したほうがよい点ではある。

## 小倉 宗

(関西大学准教授／日本近世史)

① 高塙 博『江戸幕府法の基礎的研究（論考篇・史料篇）』汲古書院  
2017年

② 藤田 覚『勘定奉行の江戸時代』  
ちくま新書 2018年

③ 平松義郎『近世刑事訴訟法の研究』創文社 1960年

④ 朝尾直弘『近世封建社会の基礎構造——畿内における幕藩体制』御茶の水書房 1967年

⑤ 藤井讓治『江戸幕府老中制形成過程の研究』校倉書房 1990年

\* \* \*

①は、「公事方御定書」の体系や編

纂・増補修正過程、同時に施行された「公事訴訟取扱」の意義など、幕府法の中心部分を本格的に解明した秀作。

②は、勘定奉行や経済政策を切り口に、江戸時代の大きな流れと幕府政治の実像を活写する。著者の作品は専門書・一般書ともに優れたものばかりだが、本書もその一つ。

③は、刑事法の側面から、幕府の組織・運営の構造と幕藩体制の特質を究明する。徹底した史料調査と正確な論証、適切な叙述は群を抜いており、法制史にとどまらない近世史研究の古典。

④は、村落の基礎レベルより支配機構の最上層にいたる近世社会の全体像を具体的に明らかにし、畿内から幕藩体制一般を見通した画期的成果。時代や社会の展開を総体として把握する視角・方法には学ぶべき点が多い。

⑤は、將軍家をめぐる政治状況や権力構造と、老中制を中心とする幕府の機構をトータルにとらえ、その形成過程を動態的に描き出す。卓越した方法論と実証性は、近世政治史研究を代表する業績。

## 小澤 実

(立教大学教授／西洋中世史・北欧史・史学史)

① 熊野 聰『ヴァイキングの歴史』創元社 2017年；平凡社 1983年

② マーガレット・メール（訳者代表千葉功・松沢裕作）『歴史と国家——19世紀日本のナショナルアイデンティティと学問』東京大学出版会

## 読書アンケート

2017年

- ③ 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男  
——伝説とその世界』ちくま文庫  
1988年；平凡社 1974年
- ④ 阿部謹也・網野善彦・石井進・樺  
山紘一『中世の風景（上・下）』中  
公新書 1981年
- ⑤ 深沢克己『海港と文明——近世フ  
ランスの港町』山川出版社 2002年

\* \* \*

①は、農民という観点から見たヴァイキング世界論。原著は30年以上も前ながら、そしてそうであるがゆえに、日本人による「西洋史」の営みとは何かを考えさせる。

②は、近代日本の歴史学生成のプロセスを、精緻な史料解読により解明した史学史の金字塔。このような作業を成し遂げたのがドイツ人という点は示唆的。

③は、中世に限らず歴史を学ぶもの誰もが読むべき書。メロウな叙述にも史料解釈にもすでに異論はあろうが、歴史家の探究心を余すところなく伝える不朽の名著。

④は、日本中世史家2名と西洋中世史家2名がそれぞれ論点を持ち寄り、自由闊達に討議した記録。日本史と西洋史が同じ土俵で対話するユートピアの記録。

⑤は、海と陸を結ぶ海港というレンズを通じて、近世という時代とフランスという地域のあり方を問いかける。本書に限らず深沢のすべての歴史叙述は無駄なく豊かである。

樺山紘一

(印刷博物館館長／西洋中世史)

- ① 三佐川亮宏『紀元千年の皇帝』  
刀水書房 2018年
- ② 鹿島 茂『神田神保町書肆街考』  
筑摩書房 2017年
- ③ ピレンヌ『ヨーロッパ世界の誕生』  
創文社 1960年
- ④ 原 勝郎『日本中世史』 平凡社  
1969年（初出は1906年富山房）
- ⑤ 梅棹忠夫『文明の生態史観』 中  
公文庫（初出は1957年『中央公論』）

\* \* \*

①は、学士院賞を受けた『ドイツ史の始まり』（2013）の姉妹編と言えるが、両方あわせて歴史学の正統性を回復。国家主題の選択から、論述の手続きまで、みごとに整って。

②は、神保町書店街には、半世紀以上お世話になってきた。そこに根城をもつわたしは、ときおり鹿島さんに出会う。この街の形成を、ここまで資料集成できるとは。

③は、イスラム世界についての公正な知識が欠けていた時代に、大胆な仮説を提唱した。1937年のこと。「マホメットなくして、シャルルマーニュなし」と。反論も続いたが、いまでも議論すると熱くなる。

④は、日本に「中世史」を創作した張本人。封建制から莊園制まで、ヨーロッパ中世をモデルとして、初めてその反映を日本に発見した。この用語法は滅びる気配がない。

⑤は、鋭い観察眼の人人が、フィールドワークのさなかに、中央アジアや中